

# 「探究」の連続。

# 自ら考え、仲間たちと協働し、前に進む力を磨く毎日。

定期試験の学習指導も神戸山手は「探究的」。課題を見つけ、解決に向かう姿勢を学校生活全体で養います。

子どもたちが生きていく未来社会で求められる力は、「課題を見つける力」「課題を解決する力」とされています。探究活動は、それらの力を育成する方法といえます。

神戸山手では、さまざまな課題に向き合い、課題の本質をとらえて分析し、どう対応すればよいかを考える習慣が身につく学習機会を提供します。

そうした探究型の取り組みは教科横断型の学習はもちろん、主要教科の学びにも導入しています。また本校では定期試験の学習指導も探究的にいきます。以下、長い説明になりますが、なぜ定期試験の学習指導が探究的で、上記の力が育成されるのかを、ぜひお読みください。



神戸山手女子  
中学校高等学校副校長  
関西国際大学准教授  
石井 豊彦

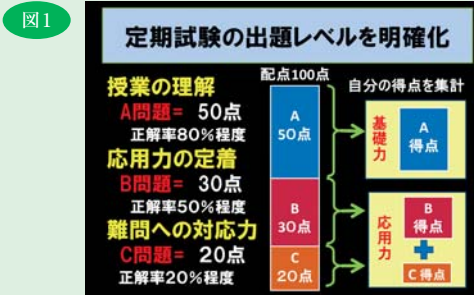
## 定期試験の「探究的」 学習指導のステップ



定期試験の指導は「リフレクションシート(定期試験の準備や結果を記録する用紙)」を作成するところからスタート。担任と生徒が「学力の向上」を探究の課題に設定し、その解決に向けて学び、試験を受け、試験結果を分析して課題が克服されていないときに、どう対応するかを考えます。

### 1 問題を3パターンに分類

定期試験の出題は、A問題：授業の理解を問う基礎問題(正答率80%程度)、B問題：応用力の定着を問う標準問題(正答率50%程度)、C問題：難問への対応力を問う問題(正答率20%程度)の3種類で出題(図1)します。



### 2 模範解答に3パターンを表示

試験が終了し、答案の返却時に配布される模範解答に、各問の配点とA～C問題の種類が示されます。



### 3 試験結果を詳細に記録

図2はリフレクションシートにある試験結果を記録する部分です。試験の総得点、学年の平均点を記録し、総得点のうち、A～Cの各問題でそれぞれ何点をとれたかを記録します。また、Aの得点を基礎力点、B+Cの得点を応用力点として記録します。

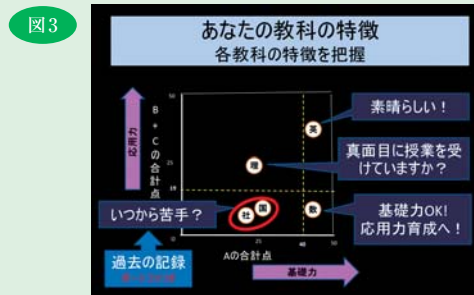


### 4 得点の内容でアドバイスが変わる

総得点と同じ60点でも、Aの基礎問題をしっかり正解している場合と、A問題で取りこぼして、BやCの問題を正解して60点になっている場合では指導内容が異なります。前者には「今後応用力が得られる勉強を考えていこう!」、後者には「基礎点を失わないように丁寧な授業態度や試験準備をしよう!」とアドバイスします。

### 5 成績状況を「見える化」

リフレクションシートには横軸にAの得点、縦軸にB+Cの得点を記したグラフ用紙があり、それぞれの科目の点を打つと、その生徒の科目ごとの成績状況が把握できます。グラフ上の点線はA問題とB+C問題の平均の得点を表しています。ある生徒の成績が図3のような結果になったとします。そうすると、科目ごとに図3のようにアドバイスすることが可能です。教員は根拠を持って生徒を褒めることができ、今後の注意を与えることもできます。

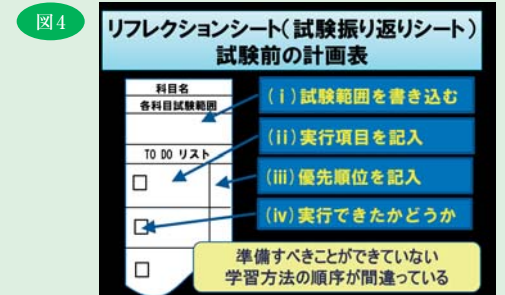


### 6 学力の経年推移も電子化

図3の社会と国語の結果は、基礎力も応用力も平均点に達していないため、苦手な科目と評価されます。しかし、この生徒は入学したときから苦手であったとは限りません。神戸山手では生徒全員がiPadを所持しており、定期考査ごとに作成されるリフレクションシートはポートフォリオとして各自のiPadに保存されています。過去の成績もすぐに参照でき、社会と国語は入学時から苦手だったのか、そうで無いとすればいつ不得意になったのか、どのような理由で苦手になったのかを調べ、どうすれば良いかを探ることが可能になります。

### 7 勉強法から確認・改善へ

図4はリフレクションシートにある、試験前にどのような準備をして臨んだかを記録する部分です。図4の(ii)の欄に各科目でどのような試験準備を行うかを記入し、(iii)の欄にその優先順位を記入し、実行できた場合は(iv)の欄にチェックを入れます。この記録から、試験準備の内容や本人が大切と思っている勉強法等がわかり、試験結果と見比べながら、どう改善するかを相談できます。



根拠を持って論理的に自分のなすべきことを決めていく経験は、未来社会でもきっと役に立つはず。是非、皆さんも体験してみてください。

## 探究学習の展開



例えば・・・  
「やまてのまど」\*

世界を、自分を、新たな目で見つめる。

本校独自の探究学習「やまてのまど」。「自分」からスタートして「地域」「日本」「世界」「未来の自分」と学年が進むごとにテーマを広げていき、幅広い視野を育んで幸せに生きるためのスキルを身につけます。教科の枠を越えた課題解決の活動では、発信と振り返りをくり返し、「自分」と「他者から見た自分」との差を確かめます。

\*タイトルの「やまてのまど」は、生徒一人ひとりが幸せになるためのスキルを獲得してほしいとの思いを込め、自己理解を深めて豊かな対人関係を構築する「ジョハリの窓」の概念をヒントに付けました。

